

再任用・会計年度任用職員部ニュース

No. 355

202.11.16

東京都公立学校教職員組合（東京教組）

再任用・会計年度任用職員部

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2 2F

TEL. 03-5276-1311 FAX. 03-5276-1312

再任用・会計年度職員部秋の交流会

晩秋の武蔵小山周辺の史跡を巡る



11月5日（土）、部会恒例の秋の交流会が行われました。今回は、「ガイドしながわ」（品川区の観光ボランティア団体）の方々に案内していただきながら、武蔵小山周辺の史跡を見学しました。

目黒線武蔵小山駅に集合し、ガイドの方から武蔵小山周辺の移り変わりについてお話を伺った後、早速出発しました。

武蔵小山駅前近くの超高層タワーマンションにまず驚き、そこから、朗惺寺（満州開拓団の殉難者慰霊碑を見学）～孟宗筍栽培記念碑（品川荏原地区は江戸時代に筍の一大産地）～長応寺（山門のち密な彫刻は富山県の井波彫刻）～浄土寺墓地（寺は赤坂にあるが、歩兵第三連隊の敷地拡張に伴い墓地のみ移転）～旧中原街道供養塔群（当時の民間信仰の様子を伝える民俗資料）～星薬科大学（SF 作家星新一氏の実父星一氏が創設。正門より見学）～平塚の碑（平塚の地名の由来）～武蔵小山パルム商店街（全長 800 メートルに 250 の店舗）などを、約 2 時間半の行程で見学しました。

部員・OB合わせて 13 名が参加し、ガイドの方の説明を熱心に伺いながら歩きました。特に満蒙開拓団殉難者慰霊碑では、武蔵小山周辺からも満州に 1000 人以上の方々が入植したものの、戦後の混乱等で日本に引き揚げてこられた方が 50 余名しかいなかったという開拓団の方々の過酷な史実を伺いました。

今回の交流会に際して見学の資料を事前に作成していただき、当日は丁寧な説明をして下さった「ガイドしながわ」の方々と、交流会の企画をして下さった部員の堀江さんに感謝いたします。

懐かしい思いで訪れた町の歴史を

部長 鈴木 達哉（板橋）

11月5日、久しぶりに武蔵小山駅に行って驚いた。目蒲線ではなく目黒線になり、2本の地下鉄が乗り入れていた。駅舎も駅周辺もきれいになり、見上げるばかりのタワーマンションが2棟も建っていた。

40 数年前、品川区に採用されて大井地区の小学校で教員生活が始まった。地方出身で、大学も東京隣県だった田舎者にとって、品川区は都会だった。武蔵小山に初めて行ったのは、職場の先輩に連れてってもらったアーケードの中の寿司屋だった。散々飲んで、帰りは目蒲線に乗って住まいのある蒲田まで帰った。当時『目蒲線物語』という歌があり、歌詞に「あってもなくてもいい」とあるくらい、目蒲線沿線はのんびりしていた。

さて、秋の交流会は、ガイドしながわの方々に連れられて武蔵小山駅からスタートした。再開発された駅前を少し離れると、たくさんの寺社や記念碑、供養塔などがあり、お話を伺った。知らなかったのは、荏原地区が、筍の産地であったことだ。マンホールのかぶりにも筍のデザインがあった。農業用水として、玉川上水から分水された品川用水があったというのも初めて知った。

また、朗惺寺では荏原郷満州開拓団殉難者慰霊碑を見学した。農業経験もない東京の商店主たちが開拓団として大陸に渡って重ねた苦難を思うと同時に、当時の満州の人たちは、自分たちの土地に入り込んできた入植者の日本人をどう見たのか、とも考えさせられた。終戦の混乱期に関東軍はさっさと撤退し、多くの中国残留孤児を生んだ。大陸への入植を無責任にも国策として進め、多数の犠牲者を出した図式は、現在の、原発政策と原発事故被害者の姿とも重なり合う。戦争終結の見通しが全く見通せないウクライナの状況も同じに見える。

懐かしい思いで訪れた町で、その歴史の一端に触れ、知らなかったことに驚き、たいへん楽しかった。交流会の締めは、たくさん歩いた後の寿司屋のランチで、これもおいしくいただいた。

晩秋の武蔵小山をあるいて

副部長 片桐 育美 （荒川）

さわやかな晩秋の一日、「ガイドしながわ」の方の案内で武蔵小山周辺を歩きました。最初に訪ねた朗惺寺にある満州開拓団の慰霊碑。この頃は比較的裕福だった武蔵小山商店街の人々が、なぜ農業移民として入植したのかの、その複雑な経過の説明がありました。

満蒙開拓団というと、長野県などの農業生産が上がりにくい地方の農民が、より広く豊かな土地を求めて新天地に出かけるものだとは思っていましたが、確かにそれが多いのだが、別の目的もあるということを知りました。いずれにしても、敗戦前、軍にも置き去りにされ、逃げたであろう人々のことを考えると、胸が痛くなりました。本当に戦争は、多くの人々をまきこみ、生活のすべてを覆す最大の人権侵害だと思います。2度とこのようなことをおこしてはならないと、改めて思いました。

その後は、江戸時代にタイムスリップした気持ちで街を歩きました。通りの所々にある供養塔や地藏堂は、ていねいに手入れされていてこの町の人々の心づかいが感じられました。

また、歩いている道の下にはかつて「玉川用水」から分岐された「品川用水」が流れていたとのことでした。そう言われると確かに道路がわずかに下がっていることが感じられ、この一帯はその水の恵みにより豊かな農村地帯だったことがわかりました。そして、武蔵野台地から引かれた「玉川用水」が細かく分岐されて、この品川の先には私が前住んでいた世田谷の千歳船橋にもつながっているのだとの説明があり、すべての原点は「水」であると言った、中村哲さんにも思いが至りました。

何気ない町や道路にも、小さな歴史があることを知り、今まで見逃していたお堂などもあらためて調べてみようと思わされた一日でした。

今に続き、これからも続いていく歴史

堀江 昌枝（南部教組 品川）

半袖で歩き回れるような秋空の下、品川区荏原地区の史跡巡りを楽しんだ。目黒線の武蔵小山駅改札口近くで、品川ボランティアガイドの山田さんから、この地区の歴史的概況について話をきく。古代から相模の国と武蔵の国を結ぶ街道（旧中原街道）が通っていたこと、田畑の広がるこの地区に筍の栽培が広がっていたこと、玉川上水から分岐した品川用水が隅々まで張り巡らされ、田畑を潤したこと、満蒙開拓団が結成され多くの殉難者を出したこと、城南大空襲でほぼ壊滅状態になったこと……。荏原地区とは目と鼻の先で生まれ育った私でもまったく知らなかったことばかりで、その一つ一つの史跡を辿ると歴史が今に続き、これからも続いていくと、肌で感じられた。



この日のために膨大な資料を準備され、2時間以上丁寧に案内してくださったガイドの山田さん、小出さん、地元出身ならではのエピソードを加えてくださった菊さん、石川さんに感謝申し上げます。

武蔵小山商店街から 「満蒙開拓」に入植！！

飛田 邦子（江戸川）

11月5日秋の歴史散歩、「地元ならではの豊富な知識で品川の知られざる魅力をお伝えします」のキャッチフレーズ通り、「ガイドしながわ」ボランティアガイドの山田さんが江戸時代から現在まで、貴重なお話を大変分かりやすく説明してくださいました。

朗惺寺では「第十三次満州興安東京荏原郷満州開拓団 殉教者慰霊碑」を見学し、武蔵小山商店街から1039名の方が「満蒙開拓」に入植したことを知りました。「商店主がなぜ入植したのだろうか？」と疑問をもち、その後品川区の動画「戦後70年特別番組 今聞いておきたいあの日の記憶―壊滅した商店街と満蒙開拓団―」を観ました。生存者や遺族の証言を聞くことで謎が解けました。「物資がなくて商売にならず廃業。国策で食料を作らなきゃならない。野菜を作り日本に送るのだ。目標は100t」と家族連れで満州に入植したのです。

数年前、江戸川区教組OB・OGで長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館を訪れたことがあります。長野県は全国27万の内、3万3000人を「開拓民」や「満蒙開拓青少年義勇軍」に送り出しました。世界恐慌後の生糸価格の暴落により養蚕業が衰退し、農村が困窮し、過剰人口のための口減らし、ソ連との軍事上の必要性から、満州北部に入植配置されたのです。

そして1945年8月9日の対日参戦。その後の開拓団の混乱、逃避行、集団自決、残留婦人・孤児の問題、シベリア抑留等々の悲惨さは筆舌に尽くしがたいものでした。「国策とは？国家とは？」新たな問いが生まれてきます。一昨年の尾久大空襲に引き続き、今回も地域に歴史に学んだことを現在に未来に生かしていきたいと実感しました。生存者の方の証言、「『知る』ということが一番の力です」を噛みしめながら…。

長年気になっていた満蒙開拓団の慰霊碑

依田 倫子 （南部教組 品川）

私は品川区に勤務して長くなります。武蔵小山にある満蒙開拓団の慰霊碑は長年気になっていました。しかし、近い（いつでも行ける）ということで、今まで行けていませんでした。それが今回のフィールドワークで、しっかり学習できてよかったです。

なぜ、商店街の人々が満州に行ったのか。中国に進出して、2年余での敗退。ほとんどの方が亡くなり、わずかな生存者。開拓団に関係する3人の方の記録を読まれた上でのガイドの方の説明ではっきりし、感謝です。また、「満蒙開拓」の地図もありがとうございます。

武蔵小山駅から旧中原街道の周辺を丁寧に教えていただきました。たまたま『世界は五反田から始まった』という本（なぜか私の小学校の図書室にありました）を読んでいたのも、なぜ荏原地区が空爆を受けたのか。小さな軍事工場が多かったからであり、戦前に小林多喜二がオルグに入ったクラシキ（パラシュート）の工場なども見ました。歩いて、実感です。

様変わる街の中で 忘れてはいけない歴史

成田 正子 （元大田教組）

久しぶりにフィールドワークに参加して 秋晴れの下 楽しく歴史探索ができました。ありがとうございます。

私が是非訪ねたかったのが、満蒙開拓団の受難者慰霊碑でした。1957年に13回忌に数少ない生存者たちが建てた慰霊碑は朗偲寺境内にどんと大きくありました。天皇の軍隊は、さっさと引き揚げて、大陸に取り残されたのは開拓団の人たちでした。戦死、自決など800余名の犠牲者を出した武蔵小山商店街からの満蒙開拓団。この事実をわすれてはならないと思います。

今はすべて暗渠になっている品川用水跡や旧中原街道を歩いて、今も保存されている記念碑や供養塔群そして寺社をガイド品川の方からその謂われなどを丁寧に話していただいて品川の武蔵小山周辺が江戸時代の交通、経済の要衝だったことがよくわかりました。筍の産地だったことも。

城南大空襲の凄まじさとその中でも被災しなかった星薬科大学の並木の存在とその理由を聞いて米軍による空襲の巧妙さを知りました。小林多喜二がオルグ活動した会社もすぐ近くにありました。中原街道から星薬科大学の中を突き抜けて山手通りに繋がる大道路建設が計画されていました。さらにタワーマンションが多数建つ予定とのこと。様変わる街の中で 忘れてはいけない歴史を息づかせていく努力の大切さを感じました。

再任用 会計年度職員部の皆さん、「ガイドしながわ」の皆さん。ありがとうございました。

歴史を後世に語り継ぐことの大切さ

森谷 憲光 （南部教組 大田）

品川区と大田区は、隣接しているため、似たような歴史を辿っている面が多いことを実感しました。

関東大震災直後、被災者の多くが品川区や大田区に避難して来たこと、明治時代、大正時代はまだ田圃

や畑が多い農村地帯であったこと、昭和初期から小さな町工場が立ち並ぶようになり、それに伴い労働者の住宅が増え、次第に田圃や畑が姿を消して行ったこと、戦前戦中は多くの町工場が軍需工場としての指定を受け、軍国主義の一翼を担っていたこと等、数えればきりがありません。

1945 年 3 月 10 日未明の関東大震災以降の空襲では、焼失家屋等被害が甚大だったにも拘わらず人的被害（死者・行方不明者・傷病者等）が比較的少なくて済んだのは、3 月 10 日の東京大空襲で人的被害が極めて多かったのも、人命優先で消火活動よりも避難行動を優先したためと言われています。

歴史を語り継ぐことの大切さを学んだ、大変有意義な一日となりました。ご案内してくださった方々に感謝です。

【品川区の城南大空襲と満蒙開拓団を取り上げた動画がありますので紹介します】

<https://tokyodouga.jp/vnh-L838vpI.html>

生きて帰ってきた人々の無念さを思うと・・・

城田 純生 （元多摩教組）

11 月 5 日秋も深まった陽気の中、品川荏原地区の歴史散策に参加しました。品川のボランティアの方の案内で楽しくかつ深みのある散策が出来たと思います。品川は私にとってあまりなじみのある場所ではありませんでしたが、ボランティアの方の深い造詣と巧みな話術で身近なものに感じることが出来ました。

満蒙開拓団と言えば長野県飯田にある満蒙開拓団の記念館には 2 度ばかり訪ねたことがあります。長野県が全国で一番多く開拓団に送ったと言う事ですが、長野のように土地がない農家の次男坊・三男坊が、満州の大地に夢を描いて出かけて行ったと言うのは、ある意味理解できますが、何故東京の農業も経験したことがない人々が少なくない人数出かけて行ったのかは、今まで不思議に思っていたことでした。しかも商店街の人々が大量参加したわけですから。戦争が激しくなって店で売るものも少なくなって、しかも国の食料を増産する国策として、その一環として開拓団に志願していったと言う話だったわけです。

しかし、戦争末期ソ連が攻めてきたとき、肝腎の関東軍は我先に逃げていき、取り残されたのが開拓団の人々だったと聞くと、軍隊の惨たらしさを知り、何も信じる事が出来なくなった人々の悔しさ虚しさを感じざるを得ません。かろうじて生きて帰ってきた人々の無念さを思うと、二度と戦争はしてはいけないと思いを強くしたことだろうと思います。この歴史散策を企画してくださった、堀江さんはじめ、ボランティアの方々には感謝するばかりです。ありがとうございました。

品川区に関わって 22 年だというのに……!!

部担当執行委員 曾根 玲（南部教組 品川）

2001 年度に品川区へ異動し、以来 22 年間。離籍役員として今も縦横に自転車で走り回り、区内の道ならわりと細い道まで知っているつもりでいましたが、やはり奥は果てしなく深いものだと思います。

品川区の教育現場は、品教組と部落解放同盟品川支部との共闘の成果もあり、人権教育や同和教育については、区の体制としてもしっかりと位置づけてきての今なのですが、地元の反戦・平和史について

は、お恥ずかしい話、学校の周年誌を作るために以前の冊子をめくり返して、という程度しか知識がありませんでした。今回の武蔵小山は以前勤めていた職場の比較的近くだったのですが、地元（自分の意識としてはそこに居住しているくらいさえのものなのです）にこんなにいろいろと歴史を伝える事物があったのだと、新鮮な気持ちになりました。

この地域は、関東大震災のあと、下町の被災者が良い水が出る、ということで多く移り住んで人口が急増したということは知っていましたので、最初の武蔵小山駅前のモニュメントが箭を模したもの（しょっちゅう見ていたのに気付かなかった！）であるけど、その理由は何かという謎をガイドさんからかけられて、水かしらと思っていたら、もっと前からの由来でした（おそらくどなたかが書いているでしょうからそこは省略）。駅近くの朗惺寺（ろうせいじ）境内の満州開拓団殉難者慰霊碑を見学しましたが、武蔵小山の元商店主などの商店街組合有志の農業移民の開拓団とうかがい、むちゃくちゃな話だと思いました。1943年のことだそうですから日本の戦況もだいぶ怪しくなり、玉砕とか学徒出陣とか言われるようになった頃です。そういう中で農業経験がないのに遠い異国の地に行ったのかと思うと、戦争というものには戦地に行くだけでは留まらない、このようなことも国策であったり、世の中の雰囲気ということで起きてしまうのだとあらためて考えさせられました。

今回の史跡巡りは、戦績だけではなく遠く江戸の時代を伝えるものもたくさんありましたが、身近な土地にひっそりと息づいているさまざまな歴史をたどるのは、とてもおもしろいものだと感じましたし、土地の反戦平和教材も教組としてもっと考えなくてはならないな、と反省することしきりでした。

東京の「満蒙開拓団」への参加は・・・

水谷 辰夫 （元八王子教組）

本年度の秋の交流会が行われました。今年は品川の地域を歩きましたが、私には一週間も早く集合場所の東急目黒線武蔵小山駅にどうやって行くのかということ調べることから交流会が始まっていました。（八王子平和資料館の竹内良夫氏から、ご自身が作られた「都内にある『満蒙開拓』慰霊碑」の地図をいただくこともできました。）武蔵小山駅に降りたち、案内役であるピンクベスト姿の「ガイド品川」4名の方々と堀江さんが待っていてくださり、ほっとしました。

朗惺寺にある「第十三満州興安東京荏原郷満州開拓団 殉難者慰霊碑」が、今回のメインの史跡でした。この品川・荏原地域からは1039名とのこと。そのうちの800余名もの方々が、生命をなくされたというのですから・・・。国策に夢を抱いて渡った中国大地は、開拓すべき土地ではなく住民から取り上げたともいうべき土地であり、歓迎される居住者とはなりえなかったでしょう。わずか1年と少しで、夢は悪夢となったのではないのでしょうか。東京の満蒙開拓団への協力は並々ならぬものがあつたと思われます。なぜなら、前掲竹内さん作成の地図の隅に「1932年6月、全国に先駆けて江東区深川から「天照園」移民団が満州に行き、終戦までに東京から満州に行ったのは、合計約一万一千人。」と書かれています。「開拓」という名の「侵略」を進んで引き受けた「帝都東京」だったのではないかと思います。

その後「史跡めぐり」は、朝日地蔵堂・京極稲荷社・孟宗筍栽培記念碑・柳亭種彦墓所など品川（荏原）のこれまでの歴史を示す場所を案内していただきました。教科書で聞いた名前や地名が出るたびに、「あーあ。この場所が・・・。」と感慨深いものを感じました。